

大乘院の調査

—第318・314-11次

1 第318次調査

はじめに

奈良文化財研究所は（財）日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乘院庭園保存修理事業」の一環として、1995年から継続的に旧大乘院庭園を広範囲に発掘調査している。池岸に関しては、一昨年までに南岸、東岸、北岸の調査を終え、昨年度は西岸の中央部の調査をおこなった。今年度は、西岸の北部に、当初4ヶ所の調査区（北区、中区、南区、西区）を設定し、途中で西区の北に接して北西区を、さらに北西へ6mほど離れた位置に小さな調査区（第6区）を設けた。このうち北区は北側で第300次と、南区は南側で第310次調査の調査区と接する位置にある。（図141）

調査の主な目的は、池の歴史の変遷を明らかにし、護岸を復元整備するための資料を得ることと、今後の庭園整備の方策を検討するために池の北西の陸地部分の状況を明らかにすることであった。調査面積は合計536㎡、調査期間は2000年10月2日から12月19日である。

調査区の現状と絵図にみえる江戸時代の様子

調査開始時には、反橋の北側では急な勾配の池岸斜面を石積みで護岸し、南側では岸の勾配がやや緩かった。

池の西側には、岸に沿って2つの小さな築山が南北に並び、さらにその西は平坦で、現在の庭園敷地外へと続く。

『大乘院四季真景図』には江戸時代の庭園の様子が詳細に描かれている。この『真景図』と現在の庭園とを比較すると、西小池とその北側の茶室（含翠亭）やその他の建物群が注目される。現在、西小池は一部を残して埋め立てられ、建物も全く残っていないが、『真景図』によると、西小池には「ヲシマ」、「メシマ」などの小島があって、それらに石橋が架けられ、池の内外に大小多くの景石が巧みに配置されて、建物の一部が池に張り出すなど、多彩な光景が展開していたことがうかがえる。今回の調査区は、『真景図』では東大池の北西岸および西小池の北東部分一帯にあたると考えられ、西小池や建物に関わる遺構の検出が予測された。

なお、西小池が埋められたのは明治時代のことと思われるが、年次不明である。1892年には含翠亭が帝国奈良博物館の敷地に移設されて、この頃までに周囲の建築物もなくなっただけではない。また、この付近は明治時代の荒池の造成と奈良ホテル開業（1909年）時に大規模な土地造成が行われている。

大乘院庭園の実測図が、1938年に重森三玲、1956年に森蘊によって作成されている（図142）。これを見ると、調査区付近の東大池の形状は、1938年から現在までの間にはあまり変化していないことがわかる。

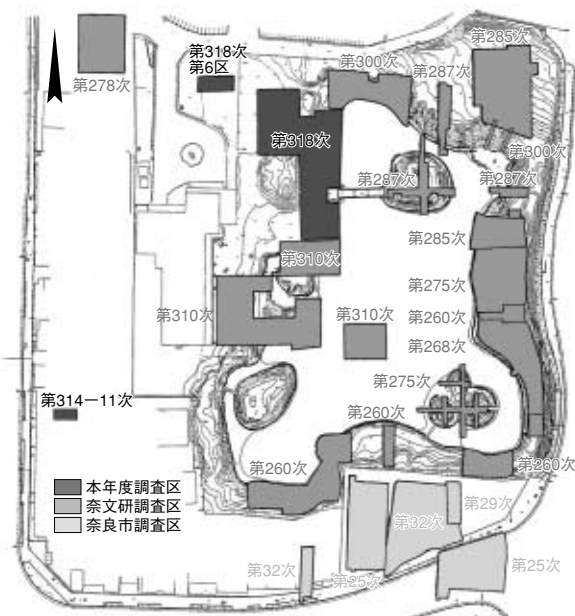


図141 第318次・314-11次調査区位置図 1:2000



図142 重森三玲作成『大乘院 庭園遺構平面図』（1938）
1:2000



図143 第318次調査遺構平面図 1:250

検出遺構

検出した遺構は4つの時期に分けられる(図143)。Ⅰ期は中世、あるいは中世以前に溯る可能性もある。Ⅱ期は『真景図』に描かれている時期の状況で、造営年代は近世以前に溯る可能性もある。Ⅲ期は近代で、西小池が埋められ、奈良ホテルの建設に伴い大規模な土地造成がおこなわれた時期であり、明治時代と考えられる。Ⅳ期は現代である(図版7参照)。

<Ⅰ期(中世またはそれ以前)>

北西区の排水用土管暗渠SX7843の掘形および数ヶ所に設定したトレンチで、近世以前に堆積したとみられる黒色または灰色粘土層を確認した。これと同様の黒色粘土層を排水用土管暗渠SX7843の東端付近の現在の池内でも確認しており、中区より北(第6区を除く)のほぼ全域に広がっているものと考えられる。この粘土層は礫層や粘土層の地山直上に堆積している。一方、池北岸を調査した第287次、第300次調査では、地山直上に粘土や腐植土の池底の堆積層を確認している。これと比較すれば、今回検出した粘土層は、自然の低湿地形での堆積層とみるよりも、池底の堆積層である可能性が高い。粘土層下面の標高は、北西区の西壁と、北区と西区にまたが



図144 北西区 溝SD7830(北西より)

る土管埋設溝SX7842の掘形の底では89.7m、北西区の排水用土管暗渠SX7843の掘形の底では89.6~89.8m、北区中央付近の池岸の断ち割り断面では89.5m前後であった。東大池西北部の池底は、かつてはこの前後の高さであったとみられる。なお、池底の標高は、これまでの調査によると、東大池のほぼ中央では88.9m(第310次)、北岸付近の池底では89.2~89.4m(第300次)であった。また、従来からの調査見解では、現在の東大池の水位は90.0m付近である。一方、南区の南壁断面でも、粘土層が現在の岸よりも西奥に入り込んでいる。これらのことから、東大池の西北部分が今よりも西側に広がっていたことは確実である。南区の南辺近くでも同様で、かつての東大池の西岸が現況よりも西方にあったことがわかる。

なお、北西区の西南端SX7835の下層近くの堆積土層中から11世紀の瓦器碗が出土した。

<Ⅱ期(中世から近世)>

SD7830・SD7831 SD7830は素掘りの溝(図144)。幅約1.5m、深さ最大0.8mで、長さ約13m分を検出した。東大池の西岸から始まり、緩やかに蛇行しながら北西に続く。底面は北西方向に少しずつ深くなっていくが、西端近くでは再び浅くなる。水が流れていた形跡がないため、水路としての機能はなかったとみられる。

SD7831も素掘りの溝。幅約0.8m、深さ0.4m。SD7830から南方向に分岐しており、さらに西区の南方へ続くと考えられる。この溝にも水が流れていた形跡がない。

SX7835 SD7830の西端の両肩に据えられた数個の石。最も大きなものは差し渡しが1.0m以上ある。これは据付場所から外れて落ちた状態で検出した。土管埋設掘形SX7842を掘削したときに落ちたとみられる。これらの石は、石橋を岸際で支える役割を果たしていたとも考えられる。

SD7832・SD7833 北西区北半で検出した素掘りの溝。SD7832は長さ約9m、最大幅約0.8m、深さ約0.4mの南北溝。SD7833は長さ約8m、最大幅約0.5m、深さ約0.4mの東西溝。北西区北半に位置する。SD7832はSD7833より新しい。いずれの溝にも水が流れたり溜まっていた形跡はなく、場所によっては底が急にすばまった形になっている。垣根をつくるための布掘り状の掘形と考えられる。

SX7825 東西に並ぶ3つの柱穴の列。これらの柱穴

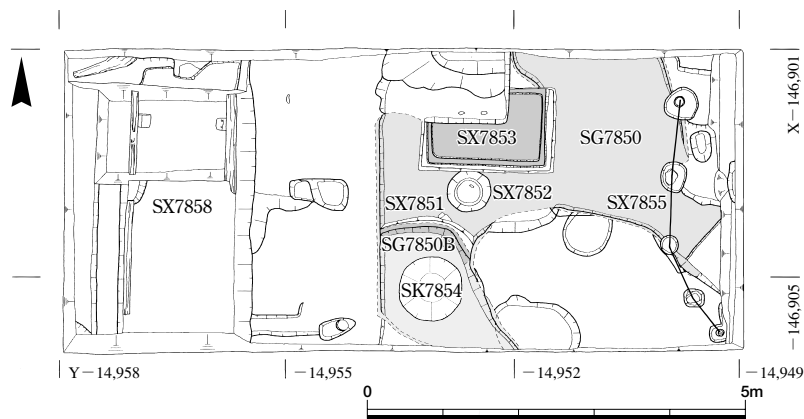


図145 第318次調査第6区遺構平面図（網掛け部分は漆喰） 1:100



図146 第6区 漆喰池SG7850ほか（西より）

はいずれも北西区の調査区北端にかかる位置にあり、穴の底に礎盤石が置かれている。柱間寸法は約2m。最も西の柱穴から約7.8m西に、第6区の東南隅の柱穴が位置する。礎盤石の標高も近いので、これらは一連の可能性はある。

SX7855 第6区東端にある柱穴群。調査区東南隅のものは、前述のように北西区の柱穴列と一連の可能性はあるが、柱筋は円弧状に復元される。

SX7828 東大池の西北隅近くにある低い円球状の高まり。周りと比べると0.6mほど高くなっている。Ⅲ期に厚い盛り土を施すことによってかさ上げされ、規模も大きくなった。

SX7829 反り橋の西側にある築山状の高まり。現状での高さは1.5mほどある。この高まりSX7829も高まりSX7828と同じようにⅢ期に厚く盛土が施されており、Ⅱ期は、ひとまわり小さく低いものであったとみられる。

SG7850A・B 第6区東半の漆喰の池（図145、146）。検出した部分は東西約4m、南北約3m、深さ最高約0.2m。北および南方向は調査区外に広がる。平面は不規則な形である。池底は平坦であり、岸は垂直に近い。ともに黄土色の漆喰で固められている。漆喰池SG7850は、後に埋甕SX7852の南西に壁体SX7851をつくり、その北側を埋めて狭くしている（SG7850B）。

SX7851 上記、漆喰池SG7850内の後補の壁体。

SX7852 漆喰池SG7850内で検出した埋甕。外径33cm、深さ36cm。池底面の高さに上端がくるように全体が埋められていた。甕の底部には7cmほどの穿孔があった。この甕は水草を植えるためか、鑑賞用小魚の魚溜りとするために設置されたものとみられる。



図147 南区池岸SX7665（南東より）

SX7853 漆喰池SG7850A・Bを埋め立てた後に設置した漆喰製の水槽状の遺構。平面形は長方形であったと思われるが、西北部分は破壊されている。残存部は東西1.8m、南北1.1mをはかる。底面を平坦につくり、周縁に壁が立ち上がる。壁の残存高は3～8cm程度。底面は、池底より約20cm高い。

SK7854 漆喰池SG7850の底面に掘削されたすり鉢状の土坑。上端の直径が約80cmで、深さが約60cmある。壁面はかなり平滑であり、この中にSX7852のような甕が埋められていた可能性がある。



図148 「大乗院四季真景図」 森家蔵(部分)

<Ⅲ期(近代)>

SX7840 西区西半の石列。10cm未満から20cm以上の大きさの石を曲線的に並べる。園路の縁石か。

SX7841 北西区南東の瓦敷。SD7830を埋めた後につくられたものであり、平瓦の破片や瓦質のレンガを細長く敷き詰めている。用途は不明。

SX7842 北区、西区、北西区を通る土管暗渠埋設溝。この土管は現在、機能していないが、組み方と勾配からみて、東から西に流れる、東大池の排水用であることがわかった。土管の直径は約20cmである。

SX7843 北区、北西区を通る排水用土管暗渠埋設溝。この暗渠は東大池の排水用として現在も機能している。設置されたのは明治時代であると思われる。池岸の桝はレンガでつくったものをコンクリートで覆っている。

<Ⅳ期(現代)>

SX7845 西区、北西区西端のテニスコート跡。1950年代にあったテニスコートの南西部分である。

SX7846 護岸石組。1974年頃に庭園が整備されたときに積まれたものである。

SX7858 第6区の西部で検出した地下構築物。箱型に深く掘削し、角杭を打ち込み、その裏に横板を積んで東西の壁をつくる。戦争中につくられた防空壕であろう。

<その他(時期不明のもの)>

SX7665 反橋の南側から第310次調査区へとつながる池岸(図147)。第310次調査区と異なり、護岸石はなく、勾配が急で垂直に近い。1938、1956年作成の実測図でこの岸の平面が確認できるため、1974年頃の整備の際に埋

められたと考えられる。整備後の、現在の汀線を、図143中に点線で示しておく。

SX7666 反橋の南側から第310次調査区へとつながる池底。第310次調査区と同様に小石が敷かれていた。

出土遺物

調査区内より、多数の土器、瓦磚類(表17)が出土した。遺構に伴う土器については、検出遺構の項で述べたとおりである。

まとめ

今回の調査によって得られた主な知見を以下に記す。

① 反り橋の北西部では、かつて東大池が西方に大きく広がっていた可能性が高い。これは今回はじめて明らかになったことであり、中世あるいはそれ以前の時期のこの池の来歴を追究するうえで重要である。

② 『真景図』(図148)には、反り橋の北西に、東大池と西小池の間に水路状の溝が描かれており、この溝が両池をつないでいるかのように見える。今回検出した溝状遺構SD7830はこれに相当するものと考えられよう。しかし、検出した溝状遺構には水が流れたり滞水した形跡がなく、東大池につながっていない。また、溝底の標高は東端が最も高く、西に向かい不規則に傾斜している。こうした点を重視すれば、この溝はSD7831とともに「枯流れ」(作庭技法の一つで、実際には水を流さずに水流を表現したもの)の遺構とみられる。

③ Ⅱ期の遺構でSX7835とした大ぶりの石は、『真景図』に描かれた水路に架かる石橋に伴うものであるとすれば、「橋挟みの石」(石橋の安定と外観を整えるために橋

表17 第318次調査 出土瓦磚類集計表

軒 丸 瓦				軒 平 瓦			
型 式		点数		型 式		種 点数	
奈良型式不明		1		6732		F 1	
中世巴		11		中世軒平		14	
近世巴		4		近世軒平		4	
中世軒丸		5		現代軒平		2	
近世軒丸		1		型式不明		1	
小型菊丸		9					
軒丸瓦計				軒平瓦計		22	
丸瓦		平瓦		磚他		道具瓦他	
重量	51.6kg	186.8kg	9.3kg	軒棧瓦	3	鬼瓦	2
点数	320	1268	12	割鬘斗	1	面戸瓦	1
				瓦製円盤	1	平瓦スタンプ	2

の袂に置かれる石)に当たる。ただし、南西岸側の大きな石は当時の地表に露出していなかった可能性もある。そうであるとすれば、これらの大石がいずれも盛土の中に埋もれていたことになり、盛土以前にこの近辺で何らかの形で使われていたものということになる。

④「枯流れ」SD7830のすぐ北にある低い円丘状の高まりSX7828は、東大池の西北拡大部分を埋めた上に人為的に盛土することによって造成された地形である。これは「野筋」(自然の丘陵を模した、緩やかな起伏のある地形)として設けられたものと考えられる。この野筋とおぼしき緩やかな円丘が、『真景図』のほぼ該当する位置に線描されている。一方、「枯流れ」SD7830の南側の高まりSX7829は、近代に至ってさらにかさ上げされているものの、近世以前の高まりは「野筋」SX7828よりもいっそう高くつくられている。これは、『真景図』に築山として描かれている高まりに相当する。興味深いことに『真景図』には、この築山の南東側に、石橋を渡した小規模な単独の池が描かれている。「枯流れ」SD7830の途中から南に分岐する、同様に枯流れとみなせるSD7831は、「築山」SX7829の東裾を巻くように通されていると思われるので、上記の単独の池に繋がるものと想定も成り立つ。

⑤「枯流れ」SD7830・SD7831、「野筋」SX7828、「築山」SX7829などは、東大池の西北に広がる部分を埋め立てた、いずれも1m近くの厚さの造成土上に造作されている。この造成の時期については、出土遺物の十分な検討を待つ必要があるが、造成土下の池の堆積土上面から11世紀の瓦器碗が出土しており、その上限の一点を知ることができる。

11世紀以後の造成というこの知見は、この地で11世紀半ば過ぎに禅定院が創建され、12世紀初めには、庭園をともなった仏堂伽藍が造営されたとの歴史の経緯と矛盾

しない。出土遺物が限られているので断定するには至らないが、大乘院庭園の歴史を考える上で重要な知見だと言えよう。

⑥ 橋のすぐ南側の東大池の岸では、これまでに発掘調査で明らかにされている他の部分とは、岸の勾配や護岸石の有無などの状況が異なっていることがわかった。

⑦「野筋」SX7832の上ないし北裾に2時期に渡って造作された布堀り状の掘形SD7832・SD7833は、垣根、それも粗朶を立て並べる柴垣の痕跡とみられる。これらの西、北方に想定される数寄屋建築と池を区画する施設としてふさわしい。『真景図』では、この検出地点付近に柴垣はみられないものの、図の諸処には四ツ目垣や矢来垣などに混じって柴垣が描かれている。

⑧ 漆喰池の一部が確認された。この種の遺構の発掘調査例は彦根城跡、名張藤堂家邸跡、岡山城跡、京都御所東方公家屋敷群跡にあるが、全国的に珍しい。それらはいずれも江戸時代のものであり、今回確認した池と同様に、埋め廻やそれに類するものを伴っているものが多い。この池は、重複関係から柱穴群SX7855よりも古いことがわかり、近世のものとみられる。(中島義晴)

2 第314-11次調査

調査地は旧大乘院西限土塀のすぐ内側で、現大乘院庭園大池西南隅小島の真西にあたる。調査は住宅の立て替えに伴うもので、東西6m、南北2.5m、面積15㎡の調査区を設定し、北側は幅80cmで下層まで掘り下げた。

検出遺構は、SK7890など中・近世の土坑である(図149)。出土遺物は土師器・瓦器・瓦などで、いずれも主に室町時代のものである。ただし、SK7897からは平安時代の瓦器1点が出土した。

今回の調査で検出できたのは土坑のみである。今後の周辺の調査の進展に期待したい。(馬場 基)

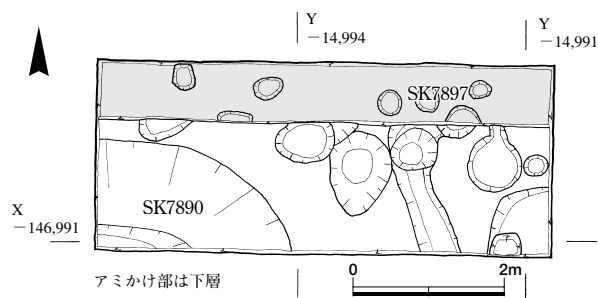


図149 第314-11次調査遺構平面図 1:100